卓球の特性的・歴史的価値の考察
―ピンポン外交を中心として―
A study of Table tennis's characteristic and historical worth.
～Focusing on the Ping Pong diplomacy～

1K05B034　　大澤　雄一
指導教員　主査　石井昌幸先生　　副査　葛西順一先生

【はじめに】

1971 年 4 月のアメリカ卓球選手団の訪中、そして米中国交正常化までの一連の出来事である「ピンポン外交」はアメリカと中国二国間の政治的転換点として論考されることが多い。一方でピンポン外交は政治的な「外交」であると同時に「卓球」というスポーツを媒介して行われたという事実がある。それにもかかわらず、「卓球」というスポーツが持つ価値からの成果が論考されることはあまりにも少ない。本研究では「ピンポン外交」が成立した理由を政治的なコンテクストからではなく、「卓球」というスポーツの特性的要因と歴史的要因からの考察を行いたい。

方法として、ピンポン外交について、1971 年当時の新聞や、ニクソン、周恩来等、当事者達の書籍を用いて論じる。また、国際卓球連盟の会長を務めた荻村伊智朗、また卓球史に精通している藤井基夫の著書等を用いて、卓球の特性と歴史を論じていく。

【本論】

第一章では「ピンポン外交」の概要について考察する。その際に世界卓球選手権大会名古屋大会以前、期間中、以後の三期間に分類して整理を試みた。また、アメリカ、中国の政治的な関係性だけでなく、それぞれの卓球協会がどのような意図を持っていたのかを考察した。そして、当時の大会の様子を卓球の技術的な側面を踏まえて論じた。

第二章では「卓球の特性」について論じる。その際に用具的特性、ルール的特性、技術習得的特性、心理的特性の四要素に分類しての整理を行った。卓球の主要な特性として、対戦相手との距離が身体的接触のないスポーツの中で最も近いという点、技術的なウェイトの高さと、技術の学習段階において基礎段階と応用段階の区分が少ないという点、友好的特性と競技的特性の二極性が介在している点などが挙げられる。そして卓球の特性とピンポン外交の関係性について論じた。

第三章では「卓球の歴史的特性」とピンポン外交の成立について考察する。ここでは卓球成立の背景、国際卓球連盟の歴史、ピンポン外交対象国と卓球の関わりの三項目に分類して整理する。ピンポン外交成立にあたって、そもそも友好的な起源を持つ卓球の歴史性を整理し、その卓球の友好的特性に根ざしたオープンドア・ポリシーを採用していた国際卓球連盟の 6 人の会長について論じた。また、1971 年当時の卓球の実力という観点から当事国である日本、中国、アメリカと卓球の関わりを、世界卓球選手権大会の結果を元に整理した。

【おわりに】

ピンポン外交は「卓球」というスポーツの特性的要因と歴史的要因の下に成立が可能となった。

このような特性を有した卓球は1971年「ピンポン外交」後、1991年コリア統一チームでの世界卓球選手権大会参加、1994年地球ユース卓球選手権大会でのイスラエル、パレスチナ選手による合同選手宣誓など、世界の問題に対して卓球独自の切り口で施策を打っている。さらに、現在世界一である中国が経済的に成長している中で、今後卓球がより世界の友好・平和に寄与する可能性を有していると言えるのではないか。政治、経済、教育、医科学等とさまざま分野との関わりの中で、スポーツの果たす役割は決して一義的にはなりえない。だが、スポーツだからこそ果たすことができる価値は必ず存在する。その価値を認識し、一つの文化として育んでいくことがスポーツの発展さらには卓球の発展につながっていくと考える。